

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780461

研究課題名(和文) ニュージーランドにおける幼保小カリキュラムの接続とその展開に関する研究

研究課題名(英文) Research on the interconnection of the curriculum from preschool to school in New Zealand

研究代表者

飯野 祐樹 (Iino, Yuki)

弘前大学・教育学部・講師

研究者番号：10633612

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトは、2011年にニュージーランド教育省より公布された幼保小カリキュラムの接続モデルに焦点を当て、この接続モデルがニュージーランドの実践場面でどのように具現化され実践されているのかについて、関係者へのインタビュー調査と実践場面の観察から検討を試みた。結果として、この接続モデルが教育省主導の下で公布されたこと、これに伴い、教育政策と実践場面との間に乖離が生じていることが明らかとなった。ニュージーランドにおける保幼小の接続モデルに対する一連の動向は、日本の保育分野に対して、政策が実践に先行することで生じる課題について警鐘を鳴らしているものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：A set of the five strands of the New Zealand early childhood curriculum have been developed since it was promulgated in 1996. For schools, parallel and complementary equivalents to these strands are the five key competencies of New Zealand Curriculum which was published 2007. Furthermore, connection model of both of these curriculums was advertised as a task force in 2011. This study highlights the connections that the strands of the early childhood curriculum and the key competencies of the New Zealand Curriculum by hearing the views of relevant people and field research in New Zealand. As a result, that the connection model is promulgated under the Ministry of Education led. Along with this, it became clear that deviation occurs between the education policy and practical situation. And it can be said that the trend over this interconnection model in New Zealand has sounded the alarm bell about producing the issue by a policy precedes with practice to the preschool sector in Japan.

研究分野：保育学・幼児教育学

キーワード：ニュージーランド 幼保小の接続 カリキュラム 評価

1. 研究開始当初の背景

(1)本プロジェクト以前の研究背景

ニュージーランドは、世界に先駆け就学前段階で教育 (Education) と養護 (Care) の一体化を達成したこと、それに伴い 1996 年に世界で初となる就学前統一カリキュラムを作成した国として注目されてきた。このカリキュラムは、Te Whāriki (テ・ファーリキ) と名付けられ、これまで、ニュージーランドの保育所勤務で得られた情報の分析、Te Whāriki の作成に携わった関係者へのインタビュー、そして、一次史料の分析を通して、

- ①Te Whāriki の作成過程について
- ②Te Whāriki の構造について
- ③Te Whāriki と保育評価との関連について

の 3 点について研究を進めてきた。

(2)本プロジェクトの契機

上記 3 点の研究テーマを背景にしながら、ニュージーランドにおける Te Whāriki と小学校カリキュラムとの接続について関心を抱いた。

ニュージーランドでは 2002 年に小学校カリキュラムの改訂が決定した。その計画案の中には「Te Whāriki との調和」という項目が記載されており、双方の接続がいかなる形態で行われるのかについて、継続的な検討を重ねてきた。結果、2007 年に公布された小学校カリキュラムは、Te Whāriki の理念から小学校のカリキュラムで用いる 5 つの Key Competency が作成され、理念レベルでの接続が Te Whāriki に合わせる形で図られている。さらに、2011 年には図 1 のようなカリキュラムの接続モデルがニュージーランド政府から公布された。

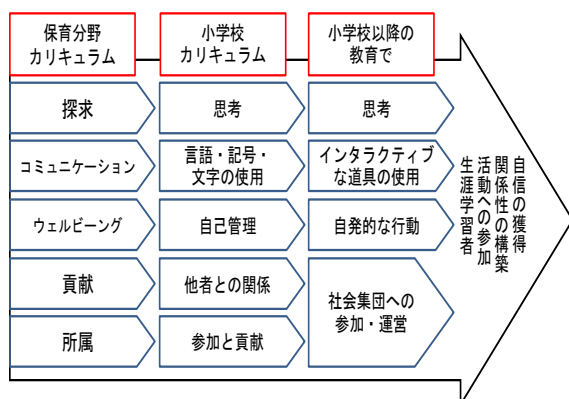


図 1 幼保小カリキュラム接続モデル

これまでの研究活動の成果より、新たな小学校のカリキュラムは Te Whāriki を基にボトムアップ的に作成されたという事実が明

らかとなっていた。他方、Te Whāriki と小学校カリキュラムとの関係については表層的な事実のみの検討にとどまっており、具体的な接続方法や活用の実態にまでは検討が及んでいなかった。このような、就学前段階を起点とするカリキュラム作成に対する検討は、単にニュージーランドにおける生涯教育の一端を描き出すのみならず、わが国の就学前施設 (幼・保) と小学校との接続、引いては、生涯教育の展望に対しても示唆に富んだ検討になるものと考えた。

2. 研究の目的

本プロジェクトでは Te Whāriki と 2007 年に改訂された小学校カリキュラムを包括的にとらえるため、下記 3 点を明らかにすることを目的とした。

(1) 小学校カリキュラムとの接続方法

Te Whāriki と小学校カリキュラムとの接続は、Te Whāriki の理念を基に作成された 5 つの Key Competency から接続が図られたことが示されている。本プロジェクトでは、就学前段階のカリキュラムを基礎に据えた背景、及び、そこに関係した理念を生涯教育の観点から明らかにする。

(2) Key Competency を実践に組み込む方法

Key Competency を基に理念レベルでの接続方法は明らかになったものの、実践レベルでどのような接続が図られているのかにまでは検討が及んでいない。就学前施設、及び、小学校での実地調査を実施し、双方の施設で Key Competency に関連した実践が作成される過程、及び、その実際を明らかにする。

(3) 評価観の接続方法

カリキュラムの接続において Te Whāriki が基礎に据えられたことを踏まえれば、双方の接続において評価観の接続についても重視されたことが考えられる。そこで、プロジェクトでは評価観の接続方法に焦点を当て検討を行うこととした。

3. 研究の方法

本プロジェクトは 3 年計画で実施した。研究の主たる方法は、ニュージーランドでの関係者 (教育省職員・保育関係者・小学校関係者・研究者) へのインタビュー調査、及び、関連施設 (保育施設・小学校) での実地調査を行った。各年度の具体的な研究活動は下記の通りである。

- 1 年目：ニュージーランドの就学前カリキュラムと小学校カリキュラムの接続

において、就学前カリキュラムを基礎に据えるに至った経緯や、その背景にある理念を検討した。

2 年目：ニュージーランドの就学前施設、及び、小学校で実地調査を行い、実践レベルでの接続方法、及び、その実態を明らかにした。

3 年目：過去 2 年の調査で得られた成果を整理した。

4. 研究成果

(1) 保育施設から小学校への移行過程

本プロジェクトでは、幼保小間でのカリキュラムの接続方法の検討に入る前に、その実態を把握することを目的に、保育施設から小学校への移行過程についての検討を行うこととした。

ニュージーランドにおける保育施設から小学校への移行過程は日本と大きく異なる。本プロジェクト前の情報収集において、ニュージーランドでは日本で見られる集団（一斉）での移行過程とは異なり、5 歳の誕生日を迎えた子どもから個別に小学校へ移行を迎えることが示されていた。しかし、その実態の把握までには至っていなかった。そこで、教育省関係者へのインタビューからニュージーランドの多くの地域で採られている保育施設から小学校への移行過程を下記の通り明らかにした。

①2 つの移行モデル

ニュージーランドでは 2 月 1 日が学期始めとなり、7 月 1 日を境に 2 つの区分に分けられる（図 2）。

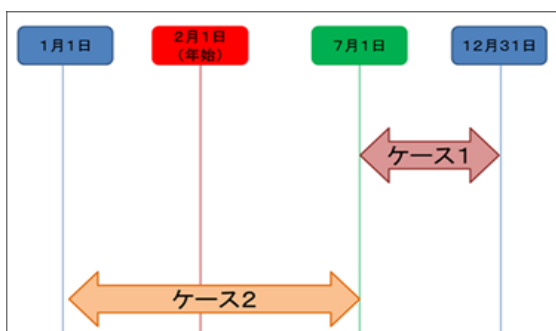


図 2 2 つの移行モデル

②ケース 1 の移行過程

ケース 1 は誕生日が 7 月 1 日から 12 月 31 日までの子どもが該当する。この期間に 5 歳を迎えた子どもは翌日から小学校へ移行し、New Entrance Class と呼ばれるクラスに所属することとなる。このクラスは移行を迎えた子どもを対象にしたクラスであり、保育施設と似通った実践が展開されている。

このクラスでしばらく生活を送った子どもは翌年の 2 月 1 日に Year1 のクラスへ進級する（図 3）。大多数の小学校では Year1 のクラスも New Entrance Class に分類されているとのことであった。

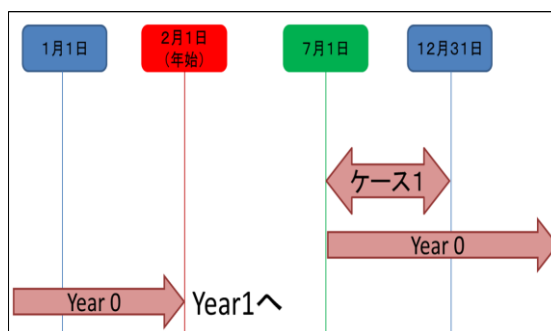


図 3 ケース 1 の移行モデル

③ケース 2 の移行過程

ケース 2 は誕生日が 1 月 1 日から 6 月 30 日までの子どもが該当する。この期間の子どもはケース 1 の子どもとは異なり、小学校では Year1 のクラスに所属し、翌年の 2 月 1 日には Year2 のクラスに所属することとなる（図 4）。

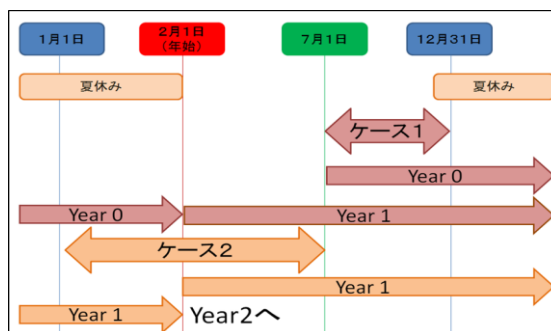


図 4 ケース 2 の移行モデル

④「飛び級」の利用

図 3 と図 4 で示したように、同じ年の生まれでも学年が異なる場合がある。その場合は、子どもの様子について小学校教員と保護者との間で話し合いの場が持たれ、認められれば、上の学年への飛び級が認められる（図 5）。

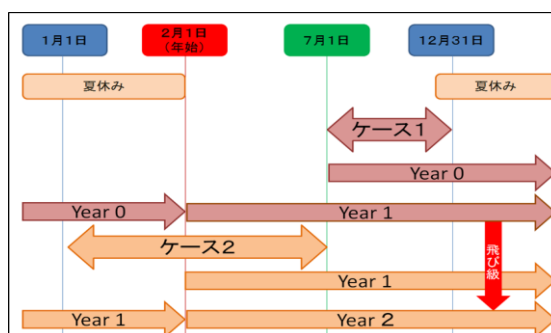


図 5 飛び級の利用

このようにニュージーランドにおける保育施設から小学校への移行過程は、子ども個々の実情に合わせた形で実施されている。保護者が求めれば就学時期まで保育施設に残ることも可能であるが、大多数の子どもは5歳の誕生日を機に小学校への移行を迎えているとのことであった。今回示したモデルは大多数の地域で採用されているが、すべての地域を網羅するモデルではなく、時期区分などの移行形態については、地域差が見られることが述べられた。

(2) 小学校カリキュラムとの接続方法

今回のプロジェクトでは、北島のウェリントンと南島のクライストチャーチの小学校を訪問し調査を行った。ここでは両地域で共通していたことに焦点を当て報告を行う。

①New Entrance Teacher の役割

ニュージーランドの小学校は大きく3つのグループに分けられる(図6)。

4～8年	Senior Class Team
2～3年	Junior Class Team
0～1年	New Entrance Class

図6 小学校のグループ編成

小学校への移行後最初に所属するのは New Entrance Class (NEC) であり、New Entrance Teacher (以下、NET) と呼ばれる専門の教員が担当している。小学校関係者によれば大多数の NET は保育分野のことにも精通しており、Te Whāriki に対する理解もあるとのことであった。この点においてカリキュラムの接続、特に NEC で実施されるプログラムは小学校教育と保育実践とを融合させた形での実践が展開されており(図7)、ここでの教育プログラムは近年日本の「アプローチ・カリキュラム」や「スタート・カリキュラム」に対して示唆的であると考えられる。



図7 NECの授業風景

NETの教員は専属となる場合が多いが、時に「Senior Class」や「Junior Class」の教員がNETを担当することもある。この場合の実践内容は、小学校側のプログラムを色濃く反映したものとなり、教員によって NEC のプログラム内容に異なりが見られることが語られた。

②幼保小間の接続・連携について

本プロジェクトでは複数の小学校・保育施設を訪問したが、その接続・連携方法で抱える課題は日本と共通する部分が見られた。

ニュージーランドでは地域特性に応じ、1施設当たり50名程度の小規模保育が主流であるが、通園する子どもたちは日本と同様に1つの保育施設から複数の小学校へ移行する機会が多い。このような状況にある場合、保育施設側はどの小学校との連携を取るべきか、或は、連携を強化するべきかについて共通の課題を抱えていた。一方、訪問した保育施設の中には小学校との連携が上手く機能していると回答した施設も見られた。これら保育施設の共通項として、移行対象となる小学校が1校のみに限られているという地域特性があった。

以上のように、幼保小間の接続・連携においては日本と同様にニュージーランドでも、連携先の選定や連携方法の構築など同様の課題を抱えていることがうかがえた。

③Key Competency の作成背景

教育省関係者へのインタビューより、ニュージーランドの小学校カリキュラムにおいて Key Competency (以下、KC) を取り入れた背景には OECD が組織したプロジェクト、通称 DeSeCo (Definition and Selection of Competencies) で示された KC のモデル(図7)が強く関係していたことが述べられた。

思考	相互作用的に道具を用いる
	異質な集団で交流する
	自律的に活動する

図7 DeSeCoのKCモデル

DeSeCoが示したKCは、人生の成功と正常に機能する社会(持続可能な発展)のために必要な能力を定めたものであり、生涯教育の観点から定められている。このモデルを基にニュージーランドの小学校カリキュラムで用いるKCについて検討を行った結果、図8のようなモデルが示された(対応する概念は同色)。DeSeCoとニュージーランドのKCモデルが大きく異なるのは、「思考(Thinking)」の位置づけである。DeSeCoのモデルでは、思考がすべての概念と関連付けられているのに対し、ニュージーランドモデルでは他の概

念と並立の関係で位置付けられている点で違いが見受けられる。



図8 ニュージーランドのKCモデル

「思考」の概念を他と並立するに至るまでには、カリキュラム、評価、そして、教授法といった複数の観点からの検討が進められたとのことであり、具体的な検討課題として以下の内容が示された。

- 1) 今後（未来）の教育体制に向けた検討
 - 知識時代を迎えた教育体制の検討
 - 様々なICTプロジェクトの検討
 - 中等教育に対する改革案の提示
- 2) 評価に焦点を当てた検討
 - 評価方法に対する検討
 - 形成的評価の枠組み作成
- 3) カリキュラムに焦点を当てた検討
 - KCに対する事例研究
 - 新カリキュラムの内容精査
- 4) 教授法に焦点を当てた検討
 - 全国調査の実施
 - 自己調整学習法に対する検討
 - 数学教育における数式処理システムの活用についての検討

(3) Key Competency を実践に組み込む方法

KCの実践への反映方法については、保育施設・小学校での実地調査に加え、教育省関係者・小学校関係者・保育関係者へのインタビュー調査から検討を行った。

①KCに対する教育省関係者の認識

教育省関係者のKCに対する認識は大きく2つの傾向に分かれていた。当然のことながら、KCの作成に携わった関係者からはこのモデルに対して好意的な反応が示された。また小学校部門の担当官からも同様の意見が示された。一方、保育部門の担当官からは総じて良好な反応が得られず、中には、KCで結ばれた幼保小のカリキュラム接続モデル（図1）を「紙面上のみの接続」と表す者もあり、教育省内でもKCに対する認識に温度差が生じていることがうかがえた。

②KCに対する小学校関係者の認識

小学校関係者、特に実践者（教員）のKC

に対する認識として、図1に示したモデルの存在は知っているものの、KCについては小学校カリキュラムの理念としてのみの認識が強く、保育施設との接続という点からKCを語ったのは少数のNETを除いては見られなかった。またNETの認識においても、複数の保育施設との接続が図られる場合、このモデル図を接続に適応させることは非常に困難な作業であり、これを基に独自の形態を作成することの必要性が述べられた。

このように小学校関係者のKCに対する認識として、NETとその他の教員との間に違いが見受けられた。さらにNETの認識においてもこのモデルはイメージの共有としては効果的であるが、実践レベルで十分な具現化が図られているかについては疑問符が付くとの回答が多く示された。

③KCに対する保育関係者の認識

KCを背景にした幼保小接続モデルに対する保育関係者の印象としては、小学校の教員と同様に生涯教育の観点からとらえれば魅力的なものであるが、実践するにはまだまだ検討の余地があるとの認識が多く示された。中でも、小学校教員との連携不足、保育分野と小学校でこれまでに培われてきた文化差など、日本が抱える同様の課題が示された。中には、この接続モデルが示されたことで、保育分野の小学校化の第一歩となるのではと危機感を抱いている保育者も見られた。

以上のような意見が示された一方、保育関係者は総じて保育分野の独自性や特徴をこれまでと同様に継続させていくことの必要性を認識しており、各施設（各地域）で独自の連携・接続方法を作り出している様子が見られた。例えば、図9は子ども個々への配布を目的に作成されていた移行ファイルであり、保育施設（上段）と小学校（下段）での生活の違いが複数の場面で示されている。



図9 移行ファイルの作成

このように小学校への移行を目的に作成される移行ファイルは複数の保育施設で独自の形態が見受けられた。

(4) 評価観の接続方法

評価観の接続方法について検討するため、小学校と保育施設での評価法について検討を行った。

①保育施設での保育評価

ニュージーランドでは大多数の保育施設で Learning Story (以下、LS) と呼ばれる保育記録を使って保育評価を行っている。

LS は子ども個々が抱く興味や関心に焦点を当て作成される5分から10分程度のエピソード記録である(図10)。保育者はこれを定例の会議で持ち寄り、情報共有や子どもの理解に努めている。

LS は子どもの関係者であれば自由に持ち帰ることができ、必要に応じて記録を付け加えられる形態となっている。子ども1人に対するLSは1ヶ月に1個の割合で作成されており、積み重ねられた記録は1つのファイルに保存される。LSは子どもの関係者の意見が1つのファイルに集約されるという点から、記録物としてだけでなく、そこには子どもを中心としたコミュニティが成立しているとの声も実践者から聞かれた。

②小学校での教育評価

小学校では NEC での教育評価についての検討を行った。NEC の中には小学校カリキュラムではなく Te Whāriki を適応している学校もあり、そこでは保育施設と同様に LS を使っての評価が行われているとのことであった。このように質的な観点から評価を試みようとする NEC が見られた一方、大多数の NEC では定量的な観点から評価が行われていた。具体的には、子ども個々に年間計画が立てられており、識字に関するテスト(図11)の他、色彩を問うテストや応答に対するテストなどが年に複数回実施され、数値の変容から成長・発達がとらえられていた。

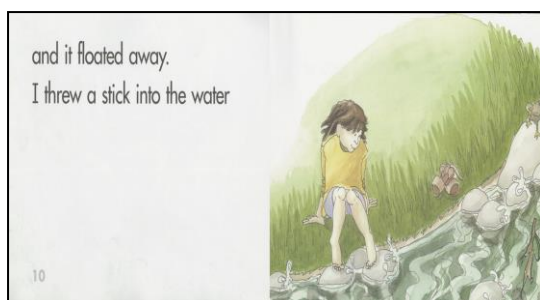


図11 文章の間違いを問うテスト

(5) 総括

ニュージーランドで示された幼保小の接続モデルの運用実態は、政府関係者と実践者との間に認識の乖離が起きている実情が示された。その理由に、ニュージーランド政府がこのモデルを先行的に発表し、実践場面との関連を十分に検討しなかったことが挙げられる。ニュージーランドにおけるこれら一連の動向は、日本の保育分野に対して、政策が実践に先行することで生じる課題について警鐘を鳴らしているものと考えられる。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

- ①飯野祐樹、ニュージーランド就学前統一カリキュラム Te Whāriki (テ・ファーリキ) の作成過程に関する研究—関係者へのインタビュー調査を通して—、保育学研究、査読有、第 52 巻、第 1 号、2014、92-104、<http://ci.nii.ac.jp/naid/110009841516>
- ②飯野祐樹、乳幼児期を通じた保育評価の連続性に関する研究—ニュージーランドの保育者が抱く評価観からの分析—、ニュージーランド研究、査読有、20 巻、2013、54-64、<http://ci.nii.ac.jp/naid/40019928875>

[学会発表] (計 4 件)

- ①飯野祐樹、ニュージーランドにおける幼小移行、日本保育学会第 68 回大会 (椋山女学園大学)、2015 年 5 月 10 日
- ②飯野祐樹、ニュージーランドにおける保幼小の接続、中国四国教育学会第 66 回大会 (広島大学)、2014 年 11 月 15 日
- ③飯野祐樹、家庭科における「親世代性」を育む授業の検討—ニュージーランドの保育実践に着目して—、日本家庭科教育学会 第 56 回大会 (弘前大学)、2013 年 6 月 30 日
- ④飯野祐樹、ニュージーランド ERO による保育評価について、日本保育学会 第 66 回大会 (中村学園大学・中村学園大学短期大学部)、2013 年 5 月 12 日

[図書] (計 2 件)

- ①飯野祐樹 他、現代と保育、ひとなる書房、2015、38-45
- ②飯野祐樹 他、「子育て先進国」ニュージーランドの保育 - 歴史と文化が紡ぐ家族支援と幼児教育、福村出版、2015、90-116

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯野 祐樹 (Iino, Yuki)
弘前大学・教育学部・講師
研究者番号：10633612